

## 「全鍍連」 2016年 12月号 巻頭言

全鍍連技術委員長 荒井 亮治 (信光工業(株) 代表取締役社長)

「表面処理技術より付加価値創出へ」



当社はおかげさまで創業 98 年となります。私の祖父が東京でめっきの修行をし、地元の電灯会社のめっき部門に勤め、その後、独立創業したと聞いています。

当時は自転車の時代で、めっきの耐食性も良くなく、剥離して研磨・再めっきや塗装をしていたとのことでした。

2代目の父は早く亡くなり、職人技の時代で、めっきを継ぐということで関東学院を勧められ入学しました。当時卒業時は学生運動の最中で、学院閉鎖等ドサクサの中、卒業できたのかなと思っております。はや 48 年となってしまいました。

日本のめっき技術も高度成長とともに発展してきました。アメリカからの日本進出時は、仕様書等だけで、生産設備は導入されず、それだけ技術のキャッチアップには時間を要しました。その後円高等で、海外流出が続いた。日本は設備・技術スタッフまでつけ、中には最新鋭の機械導入と、当然キャッチアップは早くなりました。ここに来て中国や東南アジアに追いつかれ始めている分野も多くなってきています。日本が同じことをしては衰退することは必然であり、常に日本でしか出来ないものを供給し続ける体質に変えていかなければなりません。

日本はものづくりの伝統、極める心が自然と兼ね備えている民族と思います。

茶道・華道や伝統工芸等々、幸いにも表面処理技術は対象業種も幅広く、まだ奥が深いものであります。例えば、研究機関へ提出しためっき皮膜サンプルが、今まで知られていない機能のあることが、使用する研究者から教えられる、ということも間々あります。

また特に、最近の要求機能はますます多様化してきており、めっきする素材も、複合材・エンブラに始まり、各種セラミックスや各種ガラス・Si ウエハーと多様化して来ています。

その分、顧客からも複雑かつ高度な要求や仕様を求められ、厚付けにおいての均一な厚さ、必要部分への部分めっき等々様々であります。もちろん全てに対応はできず、今後、技術の選択集中も必要となると思われます。

こうした多様化の時代の中で、この仕事なら〇〇めっき企業・・・と紹介できるようなマッチングとその仕組み構築も業界発展のためには必要になって来ると思われます。

ノウハウ部分や客先との守秘義務等も障害になると思われそうですが、そんな人のつながりを作るのも組合活動では・・・。特に青年部や、若手の活動に今後期待しております。